

# ヘルパー日誌 (最終回)

## きいてください 私たちの仕事のこと

京都・大宅診療所  
訪問介護サービス提供責任者 平島久美



いっしょに家事を（記事とは関係ありません）

**事例**  
**幸せを感じる仕事  
ひとり暮らし高齢者を  
連携で支える**

京都市山科区に私たちの職場・大宅診療所があります。同じ建物に、診療所・通所リハ・居宅介護支援事業所・訪問看護・訪問介護、そして在宅療養支援診療所として往診・二四時間緊急対応があり、医療スタッフと協力してトータルにケアができるようにがんばっています。独居の利用者さんは「診療所があるから、こうして一人で暮らしていただける」と話されます。

### 日も当たらない部屋でひとり

Aさんはご主人亡き後、住み慣れたお宅に独りで生活されてきました。訪問介護を始めた当初、日も当たらず、窓も開かない部屋におられました。居室は狭く衣類や日用品があふれ、座る場もありませんでした。奥にある寝室も万年床の暗い部屋でした。

言葉少なく無表情だったAさんですが、ヘルパーが訪問し、調理（切ったり、混ぜたり、盛り付けたり）や、洗濯物をハンガーにかけ、たたむなどの家事を一緒にする中で、口数も増え、表情も明るく変わってきました。

デイケアやデイサービスも利用、人とのふれあいが刺激になったのか、表情もにこやかにになりました。

### 夏のピンチ、乗り切った

去年の夏、熱中症で入院されたことをきっかけに、ワンルームマンションに引っ越しました。安全面でも衛生面でも住環境はたいへん良くなったのですが、ご本人は慣れない環境に混乱してしまいました。引越し初日に、以前住んでいた家に帰るといふハプニングも。

今年の夏は、食事や水分が取れなくなりました。すぐに訪問ヘルパーから

診療所に連絡がゆき、友の会の運転ボランティアがAさんのもとに出動。診察の結果、腸炎だとわかりました。いったん帰宅しましたが、体調不良は続き…。土曜午後の休診日でしたが、二四時間緊急対応の看護師が訪問、ドクターと連絡を取り、点滴・入院と必要な対応をしました。

このような連携ケアが地域の高齢者の命と在宅生活を支えています。利用者さんも、ヘルパーも、休日も心強く安心です。

退院後、Aさんは自宅のベッドに腰掛け、笑顔で「やっぱりこの家が一番落ち着くわ」。引越してからちょうど一年目のことでした。ご本人がいまのマンションを本当に住み慣れた家だと思ふようになられるまで、一年かかりました。

介護現場の仕事や、労働条件はまだまだ劣悪です。でも…どの利用者さんからも、「ありがとう」「おいしかった」「気をつけて帰ってね」と優しい言葉をかけられます。「この仕事をしてよかった」と思える幸せな喜びの時です。

# ほっと介護

81